

幽齋殿
II

無限とは限りあるものが無いこと、すなわち個我すなわち自我なるものは無いことである。無我なることが無限なることであるのである。

自分すなわち自我は無く神なること、渾^すべての渾^すべてなることが無限なることなのである。自我の反対存在はただ一つなること、渾^すべての渾^すべてなることであるのである。渾^すべての渾^すべてでないことが自我なることであり、有限なることであるのである。

有限なるもの、個我なるものは無いのである。その無も無く、ただただ渾^すべての渾^すべてなるもののみであることが無我なること無限なることであるのである。

“私は無いんですよ”と輝かれた時、大聖師は渾^すべての渾^すべてなるようにこびをよつこび続けてい給うたのである。そのようにこびが聖歌歌詞の「満ち足りて欠くことなく 行くところさわりにあわず」としえに悩むことなしとなつてい給うたのである。

自分は無い、ということは何故にうれしいのであるか。それは、自分は無いということが無限と云うことであり、渾^すべての渾^すべてであるからなのである。渾^すべての渾^すべてなるもののみが實在であるのである。

「神の国は汝らの内にあり」とは、自分、自我という外なるものは無く、内のみ渾^すべての渾^すべてであることなのである。今日一日を渾^すべての渾^すべてなるもののようにこびをもつて生きよう。

『心』は宇宙に満ちる實質、

と聖經『甘露の法雨』には書かれているのである。

この『心』こそ、満ち足りて欠くことなきもの、すなわち渾^すべての渾^すべてなるものなのである。

宇宙に満ちて欠けざるものを『心』と言ふ、全能と言ふ、神と云うのである。

吾れは無く、宇宙に満ちる實質なる『心』のみが渾^すべての渾^すべてなのである。

自分の心で渾^すべての渾^すべてなるものを把握するのではないのである。自分の心は無い、と自分の心みづからがみづからの無を知って、無に消えることが渾^すべての渾^すべてなるものが渾^すべての渾^すべてである實相がまる出しとなり、裸となることなのである。

渾^すべての渾^すべてなるものにおいては、知るものと知られるものととの相対は無いのである。渾^すべての渾^すべてなるものは独在であり、在りて在る今なのである。そして、その今なる實相こそまことの自分なるものなのである。

“吾れは感謝の本源である、”という渾^すべての渾^すべてなるものの声の、内より湧き出づるを憶^{おぼ}えた今朝である。

本源なるもの、はじめのはじめにして渾^すべての渾^すべてなるもののみが在るのである。

吾れは無く、渾^すべての渾^すべてなるもののようにこびのみが在るのである。

この渾^すべての渾^すべてなるもののようにこびが本源なるもののようにこびであり、感謝なるものの本源であるのである。

何故に、不完全なるものは實在に非ず、なのであるか。不完全なるものは渾^すべての渾^すべてなるものではないからなのである。

宇宙に満ちて欠けざる絶対なるものではない、即ちそれは自我なるものであるからなのである。

自分は無く、渾^すべての渾^すべてなるもののみが渾^すべての渾^すべてしているとき、そこに自然^{しぜん}、天然^{てんぜん}、法然^{ぽうぜん}に輝き出でているのが個性というものである。

自分が無いとき、個性が現前しているのである。

自分が無いという渾べての渾べてなるものよるこびが鳴っているのが「招神歌」であり、「大調和の神示」であるのである。天国極楽浄土なる實相が文字となつて輝き出でて「招神歌」となり、「大調和の神示」となり、聖典聖經となっているのである。

そのものが自分なき渾べての渾べてであるとき、それを“光り”というのである。

自分が無いときに観られる全てを“光り”というのである。自分無きこと、すなわち無限なることが渾べての渾べてであるからである。

自分無きことが神想観において「ジーツと観わたすんですね」と導師の言われる「ジーツと」の消息なのである。その消息において「全身の細胞」といふごとく如意宝珠にして渾べての渾べてなり」と観ずるのである。

一切を否定し、その否定をも否定したところを“今”といひ、“今”といひ、“今”といひるのである。そして“吾れ”といひるのである。それが神想観における“吾れ、今、こゝ”といふことなのである。

一切を否定し、その否定をも否定したところを“渾べての渾べて”といひるのであり、それが實相であり、龍宮本源であり、高天原であるのであり、それが神の国であり、天国であり、極楽浄土であるのである。このことを受けることが“無の門闕”に坐するといふことなのである。

やはり肉体の死を恐れるということとは、實相のよるこびを発見できていないからにすぎないのである。

欠くることなき渾べての渾べてであり、完全なるものそのものである實相は不滅であり、今こゝにあり、靈々妙々であるのである。實相だけでよいのである。神だけでよいのである。

實相は無限のよるこびであるのに、それ以外の何ものを求める必要があるであろうか。實相以外の何ものかを求めるのは實相を知らないにすぎないのである。

全實在宇宙がイザナギの大神そのものであることの現成そのものが宇宙が浄まることであるのである。

全宇宙が住吉大神（塩椎大神）そのものであること。そしてイザナギの大神の宇宙浄めの御働きが住吉の大神となつてあらわれ給うているのであるから、住吉大神はイザナギの大神とひとつであるが故に、イザナギの大神が全宇宙となつて独神していることを願わすのがイザナギの大神のみそぎなるものの現成なのである。

内なる光りとは独神すなわち絶対神なるものの光りであるのである。

内とは独在なるもの、独尊なるものそのものをいふのである。独在とは在りて在るところのそれ自身存在そのものである相であるのである。ひとり神は独在であり、渾べての渾べてであるが故に、身を隠し給うているのである。隠れ給うているといふことは、それ以外からそれを観るところの、それと相對しているものが無いといふことであるのである。ただただ、在るものだけがひろびろと在りて在るのみなのである。それが實相界の弥廣殿なる相であるのである。

神想観の“はるばると目路の限り眺むるに十方世界”といふことが独神のひとりのみがみしている、神それ自身の鳴りひびきであるといふ相であるのである。

萬物は同根であり、一つである。

それはどのような状態であるかを、現象のすがたから予想することは出来ない「一つなるもの」なのである。

一つであり一つであるところの証明不要の在りて在る莊嚴存在であるのである。

ただただ「一つ」であるのであり、この一つから一切は展開してゐるのであるから、展開された側からもこの一つなるものを証明するということには有り得ないことであり、不必要なことなのである。

一切を超えるとは、自分を超えることにはかならなかつたのである。

一切を超えることは「一つに切る」こと、現象を切つて一つなる實相に至ること、そのことを超えることにかならなかつたのである。

今「こなる莊嚴とは自分を超えている、自分ならざる自分が實在なる莊嚴を生んでいることなのであつた。

かくして、吾が内に無限、絶対、渾べての渾べてなるものを觀じ、拝し、生み出しているのが莊嚴なる吾れの吾れなるものであることを知るのである。

最早や吾れの吾れではないのである。莊嚴そのものであるのである。

“最早や吾れ生くるに非ず、神の無限の生かすちから「こ」にありて生き給うのである。”“神の生かすちから”とは生み出すはたきそのものであり、その生み出しの力が「こ」にありて渾べての渾べてであることなのである。

最早や自分はなく“生かす力”“生み出す力”のみ渾べての渾べてであるのである。自分はなく、生かすはたらきのみが「こ」に渾べての渾べてであるのである。

すべてを生むもののみ、「こ」にあるのである。それ故に“私自身を生むもの”であるのが「こ」にあり、實相を生むもの、龍宮本源

を生むもの、高天原を生み、^{ひとりのみ}独神なる七柱の神を生み出しているもののみ、「こ」にありて生み給うのである。

ま「こにも」カミムスビの神」とは、神を生むはたらき、絶対なるものを生む御はたらきそのものであり給う神であるのである。

“現象を否定しつくしたあととはどうなるのか”そこから全托であるのである。どうなろうとこうなろうと無いものは無いのが真理であるのである。捨てて捨てて死ぬなら死んでもよいのである。そこに全托なるものがみづから生きているのである。生きものとしての全托なるものが「こ」にあり給うのである。

全托なるものは全べてであり、全べての全べてであり、全べてなるものが生きて、在りて在るすがたが全托なるものなのである。全托なるものはみづから生きているのであり、全べての全べてであるのである。

ま「こにも」コトバは神であり給い、コトバは神をも生むのである。この相がカミムスビであるのである。

一切の発せられるコトバは神であり、神が発し、神が発せられている相であるのである。

コトバがコトバを生み、神が神を生むのである。そして、そのコトバは自分自身なのである。

“無色透明”とは、ひとつなる「こ」は、はじめのはじめなる「こ」、今と今と「こ」であり、渾べての渾べてと「こ」である。

高天原も無色透明であれば、七柱の^{ひとりのみ}独神も身を隠し給う幽の幽なる無色透明にましますのである。

ひとつであるとは無色透明である「こ」なのである。

淨まるとはひとつなる無色透明の輝きが更に勢ま^まること、生長することを意味しているのである。

“元津靈ゆ、幸はえ給え”とは、元そのもの、ひとつなること、渾べての渾べてなること、本源そのものを幸はえ給えということであり、本源なる澄み切りに澄み切らせ給えということなのである。

ひとつとは無色透明であり、澄み切りということなのである。それは今ここに久遠なるものとして如何なるものとも里礙せず、渾べての渾べてであるのである。

目無堅間とは無色透明なるひとつなる渾べての渾べてなる澄み切りを意味しているのである。

澄み切りなるかな。澄み切りなるかな。ひとつなるかな。ひとつなるかな。

真空妙有とは澄み切りなるひとつなる創造の本源なる澄み切りの澄み切りであるのである。

基本的神想観において、自分が無色透明となっていることに感謝するのは、ひとつなる澄み切りの消息であるのである。ひとつとは中心なる渾べての渾べてを意味しているのである。至大無外、至小無内の消息である。

神が一切のものを造り給うや

粘土を用い給わず、

木材を用い給わず、

槌を用い給わず、

鑿を用い給わず、

如何なる道具も材料も用い給わず

粘土も木材も槌も鑿も道具も材料も“無い”のである。

これらのものは既に造られたるものである。造られたるものは、はじめのはじめから在ったものではなく“無い”のである。

神は“両親”を材料として吾れを造り給い、生み給うたのではないのである。

神は如何なる現象の世界の中のものをも材料として吾れを造り給い、生み給うたのではないのである。

神ご自身もまた吾れを造り給い、生み給うたところの原因、材料であり給うことは無いのである。

因縁そのものもまた神が吾れを造り給い、生み給う材料ではないのである。

神は造り給うことも生み給うこともないのである。神ご自身が造られ給うたのではなく、生み出され給うたものであり給わな

いのである。すべての實在(まこと)の存在(こゝろ)は造られたるものではなく、生み出されたるものではないところの“在りて在る”存在なのである。

大聖師谷口雅春先生は如何なる道具も材料も(時間、空間も)用い給わずして聖典を現成し給うているのである。

人間は幸せになるための如何なる道具も材料も要らないのである。

内に常樂の国土を自覚してのみ

外に常樂の国土はその映しとして顕

現せん。

とは“内だけでよい”と言える時においてのみ、常樂なるものがあることであり、映しの世界は全くの無関係となった時にのみ、常樂なるもののみがありつつけているのであり、何処にも映しの世界の存在はないのである。常樂とは内のみ、實相のみの消息であるのである。

自在説法ということとは、説法は無いと云うことである。

未だかつて生れたることなく、未だかつて悟りたることなく、未だかつて説法したることなき、それらと全く無関係の、無の無なる活気凛々たる輝くもののみ常樂しているのである。

三界に身を現さず。三界は無いのである。未だかつて来たるものなく、去つて去りたるものなく、過去、現在、未来にあらざ、過去、現在、未来そのものが無いのである。未だかつてどの時点においても説法せず。これが自在なる説法であるのである。

非雑食身。非雑行身。非説法身である。

無の門関想うべし。無の門関透るべし。

無の無なる、それ自身渾へての渾へてであり、相対なきものこそ、立ついのちであるのである。

独り子とは独り神ということであるのである。

独り子とは絶対なる子ということである。親があつてはじめて子である、という因縁、相対の存在ではないということである。それ自身、在りて在る、渾へての渾へてなる独在なる子であるのである。

釈尊、キリストは一行も文章はお書きにならなかつたのである。説法そのものが無いということを生きてい給うたのである。

神もまた一行も文章はお書きになつていないのであつた。説法そのものが無いことそのことを生き給うてい給うたのである。

その釈尊、キリストを無しとして超え給うているのが大聖師であり給うたのである。

大聖師は“私は無い”と、生れたること無きご自分を生き給うたのである。説法は無いということは自分そのものが無いということを生き給うていることそのことなのである。その上に立つて大聖師は自在に文章を書き給うたのである。

自在とは“無い”ということそのことであるのである。無の門関の消息である。

真空妙有、真空の生活が今を生きたることであるのである。

生れたる自分はなく、生れたる説法は無く、生れたる文章も無いのである。真空であり、澄み切りであるのである。

澄み切りとは、はじめのはじめであり、渾へての渾へてということであるのである。今ということである。

一切が無いということとは、一切があるということであるのである。

無の門関とは一切がある門関であるのである。

一切があるからこそ、一切現象は無いのである。

吾が内に神あり。

神の内に吾れあり。

神は吾れに宣り給う。

「吾れは汝を生み、汝は吾れを生めり」と。

「吾れは汝より生れたり」と。

吾れは如来の合掌の内にあり。

そして如来は宣り給う。

「吾れは汝より生れたり」と。

天地一切萬物のごとくは、觀世音菩薩すなわち尽十方無礙光如来であり、その合掌の内に吾れあり、そして觀世音菩薩は

吾れに宣り給う。

「吾れは汝より生れたり」と。

高天原も、龍宮本源も、全實在界も、神詰りに詰り給う大神もすべて、吾れはその内に抱かれ、そして吾れに語りかけ給うのである。

「吾れは汝より生れたり」と。

コトバ(または思念)において、「無い」と言える全てを「無い」とし、その「無い」も「無し」とすることこそ全身全霊浄まることにほかならないのである。

この浄まりを勢まることの一筋の道があるのみであり、そのみでよいのである。

この浄まりの極において、浄まりなるものそのものが、手の舞い足の踏むところを知らないよろこびを輝き輝いて、一切の聖典のみコトバとなつているのである。

吾が内の内なる神の国そのものが鳴りひびいて、輝きわたつて聖典となり、聖經となり、天地一切萬物となつて輝きわたり、鳴りわたつているのである。

天地一切は吾れの吾れなるものの鳴り出であり、輝き出であるのである。

その相が天地一切萬事萬象萬物ごとくが觀世音菩薩すなわち尽十方放射なる無礙光なる如来であることなのである。

それが宇宙の大神イザナギの命が住吉大神となり給いて、光明燦然として宇宙を輝いて給う相であり給うことなのである。

實相なるものは一切を放つているのである。實相は満ちて欠けざるが故にである。満ちて欠けざるが故に、外に求める必要はな

いのである。求める必要のない存在はただただ創造し、表現するのみである。

實相なるもの、円満なるものは、外なるものを求めることを断ち切るという相ではないのである。一切を円満しているが故に、求めること自体が不要、すなわち無いのである。

浦島太郎が龍宮界において、たった一人男性としてあるということとは、「一人児」であることを意味しているのである。すなわち自分をとり巻く全すべての全が、天照大御神(すなわち女性なるもの、如性なるもの)であることを意味しているのである。

神我一体、萬物同根は本来因そのものの相であつて、他の如何なる因縁たるものでもないのである。本来因なるものそのものが渾べての渾べてであるのである。即ち、「一」なるものそのものなのである。

神は如何なる必要性もなくして創造し給うているのである。

必要性によつて意義づけされることなき相こそが真の創造性であり、神の子の創造の相もまた同じ消息であるのである。

あらゆる出逢いと見ゆるものの相の前に、「一」なることが先きなのである。因縁仮和合を超えているまことの相であるのである。出逢いが無くして「一」なるものは在りて在りつづけなのである。

親が先きか子が先きか。子のいない親はなく、親のいない子は無いのである。親と子とは「一つ」であるのである。

神なる親様が先きか、子なる神の子が先きか。神の子の無き親様は無く、親様の無き神の子は無いのである。

神と神の子は「一つ」なるものなのである。それは因縁仮和合の相^{すがた}ではなく、本来因すなわち本来なる、はじめのはじめなる因^{もと}そのものの、そのままの相によるが故に、久遠そのものであるのである。

それは如何なるものによっても影響左右されることなき、崩れることなき不滅なるものであるのである。はじめのはじめ、「一つ」なるものにつきて――。

神と神の子は出逢いを必要としない。「一つ」そのものであるのである。

「一つ」なるものの消息は、すなわち「大調和」の消息であり、「大調和の神示」は「一つ」なるものの鳴りひびき、輝きが言葉に翻訳されたるものなのである。「一つ」なる消息こそが、こらえ合ったり我慢し合ったりすることのない相^{すがた}なのである。

「一つ」なるものは、外なる如何なるものによっても崩れ去ること無のである。死によつてきえも離され崩れることはないのである。

出逢いという因縁仮和合によつて成り立ったものは、他への出逢いまたはそのあり具合によつて崩れるほかはないのである。出逢いによらないものが「一つ」なるものなのである。

神我一体、自他一体、萬物一体――すなわち大調和なるものにつきて――。

大とははじめのはじめなる「一つ」なるものを言うのである。

はじめのはじめなるものとは「一つ」なるものごとであり、「一つ」なる相^{すがた}こそが浄まりの極であるのである。

「一つ」なるものは、言葉にて、あるいは想念にて「無し」と言えるものを「無し」としたま^{こと}の浄まりの浄まりの消息であるのである。

神さえも生んだところの、渾べての渾べてなるもの、絶対なるもの、無限なるもの以上の渾べての渾べてなるもの、絶対の絶対なるもの、無限の無限なるものを自分の中に味わせて下さるのこそ、まことの神の愛、神の拌みにましますのである。

これが幽の幽の幽なる、無の無の無なる神および神の愛の消息にましますのである。そしてここに自分の自分なるものよろびなるものがあるのである。

ここに太陽の光線の色を染しむとともに、太陽そのものを生んだところのものまことの創造者としてのはじめのはじめなるものよろびに至る消息があるのである。

聖經『日々談論三十章経』の中には、

神の国の永遠の構図に於いて神と偕^{とも}に

創造するの喜びを感じています。

という創造者として大神の経綸^{けいりん}を扶翼^{ふよく}する消息が歌われているのである。

風景を見に行くということは、風景を生み出しに行っているのである。